令和6年6月27日

第７５回上伊那教育会夏期講習

夏期講習だより　第４号

文責　鎌倉　圭佑（美篶小学校）

６月２０日（火）　第３回　夏期講習事前読み合わせ会報告

第３回読み合わせ　令和６年６月２０日（木）
読み合わせ範囲　「西田哲学選集」第一巻　「西田幾多郎による西田哲学入門」　第二部　「善の研究」
第二部　「善の研究」
第二編　「実在」　第三章「実在の背景」
第四章「真実在は常に同一の形式を有っている
司会者：　宮下　和峰　先生（西箕輪小学校）　　レポーター：　青木　はるか　先生（長谷小学校）

＜青木　はるか先生レポートから＞

１．はじめに

小学校教員二年目となった今年、初めてこの講習会に参加させていただきました。難しいとは聞いていましたが、やはり配られたテキストは難解で、何度読んでも理解ができたとは言えません。文字を追いながら自分なりの考えをメモしても、時間が経つと掴んだことがぼやけてしまうので、もう一度読む。それを繰り返すと、解釈もどんどん変わってしまい、私は正しく西田氏の哲学を理解できているのだろうかと不安になります。そうして思考することには労力が要りましたが、分かったと感じた瞬間には楽しさもありました。また、自分が今まで何を考えてきたのかを振り返る良い機会をいただけたと感じます。

２．実在の真景とは

第三章で私が考えたことをまずはまとめたいと思う。この章（125 項 1 行—129 項 7 行）では、実在の真景とは、主客の対立のない独立自全の一事実であり、それは純粋経験である我々の情意があって成り立っている。我々の世も我々の情意を本に組み立てられている。と述べられているのだと思う。 つまり、私がいるということも含めて世界であり、私が世界を認識してきれいだなとか、すがすがしいなと思うことを通して私の世界が実在しているのだと思う。さらに、「我々の見るもの聞くものの中にも 皆我々の個性を含んでいる」（127 項 11 行）と述べられていることから、情意で成り立つ実在や世界 は人によって異なるものだと思われる。そして、「我々の情意は相通じ相感ずることができる」（128 項 11 行）ということも合わせて考えると、私たちは一人一人異なる世界の中で生きているが、共感し合う こともできると言えるのではないだろうか。私はよく自分と他人は違うという言葉を耳にするし、私もそう思ってきたが、どうして違うのか、そして違うのに何故共感できるのかを普段より深く考えることができた。ここまでの考えは、前回の討議にて唐沢先生がおっしゃっていた、私たちが生きているということも含めて世界であるという言葉が、大きな助けとなった。 また、この章では主客はものの見方の違いでしかないと述べられていて、興味深いと思った。私は客観的に見たものの方が正しく物事を見れていると思いがちであったが、そうではないのかもしれない。

３．真実在は常に同一の形式を持っているとは

第四章（129 項 9 行—133 項 7 行）では、全ての意識現象及び、自然現象も含む独立自全たる真実在は、一つのものが自分自身にて発展完成するように成立すると、意志の作用を例に述べられているのだと思う。そして、この時、「真正の実在は芸術の真意の如く互いに相伝うることのできないものである。伝えうべきものはただ抽象的空殻である」（129 項 14 行—15 行）とある。ということは、実在が成立する過程は全ての人が同じでも、その中身は各個人またはその時々で異なるのだと思う。安易な例えかもしれないが、同じ音楽を聴いていても音の感じ方が全く同じ人はいないし、同じ人が違う時に聞いても全く同じように感じることはできないということだろうか。 さらに「普通には固定せる物体なるものが事実として存在するように思うている。しかし実地における事実はいつでも出来事である」（132 項 12 行—13 行）を読んで、私は実在とは

簡単に揺れ動いてしまうあやふやなものだと感じた。しかし、よく生活を振り返ればその通りであるとも思う。またしても安易な例えだが、熱々のご飯もすぐに冷めたご飯になる。また、クラスの子供たちに成長を感じる現 象も、子供たちが固定された存在ではないからこそ起こることだと思う。私自身でさえも、その時々に よって全く同じであると断言できない。今私が認識しているものは、常に変化の中にあるということなのだろう。純粋経験は現在だと唐沢先生はおっしゃっていたが、ここにきてその意味に少し触れられた気がする。

４．日々の生活を振り返って

　第三章、第四章を読んで私が感じたのは、結局人間は一人なのかもしれないということだ。私の世界は私が啓くしかなく、他の人もそうなのかもしれないと思った。例えば、子どもに私がいくら教えよう、教えようとしても、どのように受け取るかは子どもに委ねられている。だから私は、子どもが没頭できるような学びを提供する努力をするしかないのだと思った。これはよく考えてみれば当たり前の感覚でもあるのだろうが、本講習が無ければここまで考えなかったかもしれない。 また、生活する中で目の前のことに集中する時間をもっと増やしたいと思った。自分の純粋経験を探す中で、最近は何かをしながら別のことを考えてばかりいることに思い至った。私生活はまだしも、子どもと向き合う時間には、子どもの現在を捉えていきたいと思った。

＜グループ討議から＞

〇子どもによって、受け取り方が違う。受け取り方は子どもにゆだねられるという記述に共感できた。全体指導でも、子どもによって受け取り方が異なるから、話し方や伝え方を工夫していかなければならないと感じた。

〇客観的に捉えたものの方が正しくというところにはっとさせられた。子どもたちの本当の姿を見るのは難しさもあるが、言葉の裏にあるものを感じ取ったりする必要があり、そのために、私たちが何ができるか考えていく必要があると感じた。

〇それぞれの見方や受け取り方が違うことを踏まえ、そのものの良さを認めていくことが大切だと感じた。子どもたちが授業をつまらないという時も、無理に聞かせようとするのではなく、楽しみを伝え、面白さを感じ取ってもらえるよう、工夫することが必要だと感じた。

〇レポートに共感できる部分が多くあった。結局人は１人というところで、授業中教師側の意図があっても、子どもの振り返りなどを読むと一人一人の受け取り方が違っていることを感じる。子どもと一緒に授業を作っていく中で、子どもが興味を持ち、没頭できる経験をさせてあげたいと感じた。

＜唐澤　正吉先生から＞

〇レポートにおいて、とてもよく書けており西田哲学の極地を得ているのではないかと考えさせられるようなレポートでした。西田哲学は言語的なものをもって存在を認識できる。言葉にあらわさなくとも、心の底に思っていることは伝わっていく。そのような雰囲気が子どもに伝わってしまう。情意が大切。

〇教師の思いは良くも悪くも伝わっている。心の底から子どもを思っていれば子どもたちは信頼してくれるし、その逆に子どもに遠慮や忌避感が少しでもあるとそれが伝わり、子どもたちは同じように負のサイクルを回っていく。

〇西田哲学を扱う際に、「実在の真景」とは、「情意」である。100 人いれば、100 個の世界（感じ方）があってよい。異なる世界を持ちながら、1 つの世界を創っていくため、難しさはあって当然。本当に難しいと感じること自体が素晴らしいこと。

〇学級経営を進めていく中で、3 分の 1 の子ども達の伸びる芽をかいているかもしれないとの自戒。